

スタンダードズに基づいた 小学校での日本語教育

米国ハワイ州ホノルル市 アイナハイナ小学校 プログラムコーディネーター / 日本語教師

ジュンコ ハナイ アゲナ

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。

1 はじめに

ハワイの学校にとって日本語プログラムというのは珍しくない。ハワイ大学には大きな日本語専攻部門があるし、ほとんどの高校で日本語を選択科目として取ることができる。日本語を選択科目としている中学校も少なくない。小学校レベルでも日本語を特定の学年もしくは全校生徒の教育カリキュラムに組み込んでいるところがいくつもある。しかしながら、小学校では州からの外国語教育に対する資金保証がなく、日本語教師はパートタイムになってしまうのが現状である。

ホノルル市郊外にあるアイナハイナ小学校では、ハワイ州でスタンダードズ (Standards: 学習すべき内容についての基準) の見直しが始まった1996年に、ハワイ州の外国語教育担当者と小学校教員免許を持つ日本語教師1人、そして日本語教育に対して強い興味を示したアイナハイナ小学校の当時の校長と教師らによって、スタンダードズに基づいた「NIHONGO」プログラムが設立され

た。ハワイ州の新しいスタンダードズが出来上がった1999年には、国際交流基金の海外日本語講座専任講師給与助成プログラムの援助と連邦政府 Title VII: Foreign Language Assistance Program からの補助金を受けて、「NIHONGO」プログラムを拡大することができた。

2 アイナハイナ小学校「NIHONGO」プログラム

アイナハイナ小学校では、幼稚園 (5歳) から6年生 (12歳) までの全校生徒が週2回日本語を学習している。授業時間数は学年によって違うが、週1時間から1時間20分くらいで、授業は生徒たちの教室ではなく日本語教室で行われる。小学校ではほとんどの科目の授業が自分たちの教室で行われるが、日本語教室を設けることは1996年のこのプログラムの設立に当たってとても大切なことであった。日本語学習だけの教室があれば日本語を学ぶ環境を作るのに最適だし、生徒にとっても教室に入ったら日本語を聞いて話すという雰囲気があり集中力を維持できるからである。日本語教師は2人とともにハワイ

ハワイ州外国語コンテンツスタンダードズとナショナルスタンダードズとの比較

ハワイ州外国語コンテンツスタンダードズ	ナショナル	
1: コミュニケーション、対人 (Interpersonal)	生徒が会話や読み書きを通して適切な情報を相手から会得し、自分の意見を述べたりすることができるという内容	同様
2: コミュニケーション、解釈 (Interpretive)	生徒が読み取る力と聞き取る力を持っているという内容	同様
3: コミュニケーション、発表、提示 (Presentational)	生徒が聞き手や読み手のために様々なピックに於いて発表、提示することができるという内容	同様
4: 文化 (Cultures)	生徒が文化を学習する上での3つのP、風習/習慣 (Practices)、物の見方 (Perspectives)、物 (Products) の関連を学びながら他文化を理解するという内容	この項目が2つに分かれている
5: 比較 (Comparisons)	生徒が自分の母国語と外国語の言語の比較を通して言語の理解を深めるという内容	言語と文化の比較/理解が記述され2つの項目に分かれている
6: コネクションとコミュニティ (Connections & Communities)	生徒が外国語を学んでいる際に他の教科内容にも関連づける (Connections)、教室外での様々な環境に於いて学んでいる外国語を使うことができる (Communities) という内容	もっと細かく記述され、コネクションとコミュニティそれぞれ2つずつの項目に分かれている

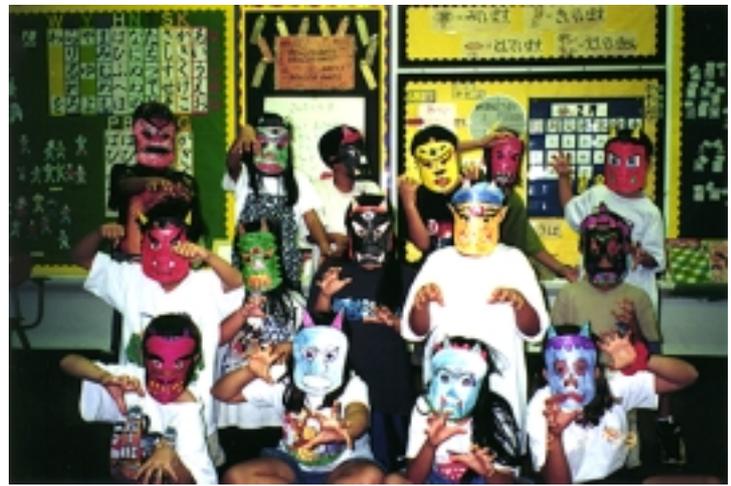
州での教員免許を所持し、1人は日本語をハワイの様々な学校で長年教えてきた経験があり、もう1人はオレゴン州の日本語イマージョン学校で教えた経験を持っている。前者は低学年、後者は高学年を担当しているが、2人の経験を生かしてチームティーチングをするように毎日スタンダーズの授業について話し合っている。更に去年改訂されたハワイ州外国語コンテンツスタンダーズ (World Languages Content Standards) についてアイナハイナ小学校全教師に説明したり、日本語の授業で学んだことを各クラスでどのように強化できるかなどを話し合う「NIHONGO」委員会会議を開いたりしている。

3 外国語コンテンツスタンダーズ

外国語スタンダーズは5つのC (Communication, Cultures, Comparisons, Connections,そしてCommunities) から成り立っている。その5つのCを中心にコンテンツスタンダーズが何項目がある。ハワイ州の外国語コンテンツスタンダーズ(1999年)は6項目あり、11項目あるナショナルスタンダーズ(1996年)と比べて項目数こそ少ないものの内容はさほど変わりがない。(前ページの表参照)

4 スタンダーズに基づいた授業

スタンダーズを理解した上でそれに沿ったレッスンをすると目的のはっきりした授業となり、アセスメントや次の目標を立てるためにもスタンダーズは必要である。その際アイナハイナ小学校の日本語プログラムでよく使われる方法は、5つのCの一つであるコネクション(ハワイ州外国語コンテンツスタンダーズの項目6)にもあるが、日本語を他の教科の内容と関連づけて教える方法である。このIntegrated Lessonsと呼ばれる方法では、授業内容が濃くなり生徒にとってもより意味のある授業となる。例えば、低学年に動物の名前を日本語で教えるとき、自分たちのクラスの理科の授業で動物の勉強をしている期間に教えれば生徒たちが実際に学んでいることと繋がりができるし、生徒たちもより興味を持って取り組む。もっと具体的な例を挙げれば、「山に住む動物」「海に住む動物」「陸に住む動物」等に分け生育地(habitat)の勉強を通して、あるいは「アジア大陸の動物」「アフリカ大陸の動物」等にわけ社会を通して日本語を教えることもできる。つまりIntegrated Lessonsは理科や社会など一度に数教科のスタンダーズを満たすこともできるのである。ここでは、図工を通してハワイ州外国語コンテンツスタンダーズに基づいた日本語の授業例を挙げよう。



鬼の面を作ってポーズ。この鬼の面を使って様々な会話ゲームをした

節分(ハワイ州外国語コンテンツスタンダーズ 項目1、4、6)

生徒は節分の日のために鬼の面を作り豆撒きをする。まず教師が鬼の出てくる昔話を紙芝居を使い日本語で紹介し、鬼や節分の日について話し合う。次に鬼の面を作るが、初めに線と形について学び、いろいろな線(真直ぐ、ジグザグ、カーブ等)を使って様々な形を描く。その様々な形を生かして鬼の目や眉毛、髪の毛や角を描き、色を塗り、鬼の面を完成させる。面ができたならそれを使って会話やゲームをする。鬼の面を前に並べ、質疑応答を通して他の生徒たちにどれが自分の面か当ててもらおうのである。

- 例： 生徒Aの描いた鬼の面はどれか当てる場合
- 生徒B 「(A君の鬼の)口は大きいですか。」
- 生徒A 「はい。」
- 生徒C 「目は青いですか。」
- 生徒A 「いいえ、黒いです。」
- 生徒D 「歯は三角ですか。」
- 生徒A 「はい。」
- 生徒E 「(一つの鬼の面を指差して)これですか。」
- 生徒A 「当たり！」

自分から進んでいくつもの文章が言えるレベルであれば、1人で自分の鬼の面について説明する。他の生徒はその説明を聞き、どの鬼がその生徒のものか当てる。当たったらその生徒は自分の鬼の気に入ったところを「～が好き」の文章を使って説明する。(例：「私の鬼の黒い目と大きい角が好き。」)自分の完成作品について話すのは、図工の授業の一貫でもある。またこのゲームは注意して聞いていないとできないので生徒の集中力も養成する。さらに、このゲームを応用してアセスメントとしても利用できる。

最後に豆撒きをする。文化を学習する上での3つのP、

豆撒き(Practices)、豆撒きの目的と理由(Perspectives)そして豆撒きの豆(Products)について話し合い、実際に豆撒きをした後、数の復習をしながら豆を配り食べる。

この一連のレッスンはコンテンツスタンダードズの他の項目(例えば生徒が昔話を日本語で聞き取るという点から項目2)にも繋げることができるが、生徒の集中力と興味を維持させるため、一度にあまりにも多くのスタンダードズをねらわないようにしている。多ければ多いほどまとまりがなくなるし、焦点を見失ってアセスメント



日本語クラスで高学年がクラス毎にゲームや工作などのテーマを決め、「アイナハイナ小学校日本文化の日」に低学年に披露した。これは太鼓(手前)と柔道(後方)グループ



名前のスタンドグラス。名前と8本の線を工夫してつなげてデザインを作った



「アイナハイナ小学校日本文化の日」のおはじきグループ。低学年に教えているところ。このクラスはゲームをテーマにし、他に将棋や羽根つきなども教えた

もしにくいからである。

5 今後の課題

今後の課題は、スタンダードズに基づいたアセスメントである。アイナハイナ小学校の日本語教師2人は、プログレス・インディケーター(Progress Indicator)を開発すべく外国語コンテンツスタンダードズ研究委員会に属している。例えばハワイ州外国語コンテンツスタンダードズの項目1の場合、生徒がどのような会話(そして読み書き)がどれくらいできたときに「項目1を達成した」といえるのかというインディケーターを制作するのである。それによって生徒がスタンダードズを満たしていないとなれば、授業、カリキュラム、アセスメント等を見直さなければいけないし、満たしているとなればそれを土台として次のステップに進まなければならない。

新しいハワイ州スタンダードズが出来上がって、外国語教育も大切な教育の一貫とみなされるようになってきたが、小学校ではまだまだこれからである。多文化多国籍の世界で将来を担う子どもたちのために、これからもさらにプログラムを強化して外国語教育を広めていきたいと考えている。

スタンダードズについての参考文献：

- (1) Standards for Foreign Language Learning : Preparing for the 21st Century, National Standards in Foreign Language Education Project, Funded by the U.S. Department of Education and the National Endowment for the Humanities, Additional Support from D.C. Heath and Company and EMC Publishing Company, Allen Press, Inc. Lawrence, KS, Copyright 1996
- (2) Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century, National Standards in Foreign Language Education Project, Initial Project Funded by the U.S. Department of Education and the National Endowment for the Humanities, Additional Support from D.C. Heath and Company and EMC Publishing Company, Allen Press, Inc. Lawrence, KS, Copyright 1999